

2015 年度を迎えて一京都造形芸術大学教職員総会挨拶

2015 年 4 月 1 日（水曜日）

尾池和夫

キャンパス整備がすすむ中で、瓜生山学園は、2016年に40周年を迎えます。それに向けて、学生の就業力を育成し、社会人に対する芸術教育活動の普及と拡大という教育改革への取り組みを具体的な成果へと結びつけていく年度にすると、2015年度を特に位置づけています。

この大学を設立した徳山詳直さんの理念を、今こそ再認識して、芸術立国之碑に刻み込まれた基本理念のもと、京都文藝復興の考えを復唱して、教育の現場に臨んでいただきたいと思っています。大学で学ぶ学生にとって、とにもかくにも、世界で活躍する本物の人材に触れることが何よりも大切な一生の宝になります。その機会をたくさん与えてあげてほしいと思います。

繰り返して申し上げることも含めて、今日は7つのこととお話しします。

第1は、卒業生のことです。去る3月の卒業式で、京都造形芸術大学で学位を得た方は、現在までに博士30名、修士817名、学士9047名になりました。学園の40周年に向けて同窓会を組織的に立ち上げることが大切です。そのためには、マールマガジンなどの手段で、常に卒業生の活躍を伝えることが必要です。

第2に、私からも教育改革の取り組みについて触れておきます。改革の第1サイクルが終わって、第2サイクルが始まる年度です。何よりも、学生のための教育の質を保ち、教員自身が教育力を高めることが、具体的に求められます。本日は、教育活動点検の新たな考え方も議論されました。教員の自己点検評価書をまとめるとき、1人ひとりの教育活動を中心にしつつ、さらに研究、社会貢献の活動を自己点検していただきました。それらをさらに相互評価しながら、教育の質の向上に資する方針です。本学が、学士号を取得するすべての学生に、創造力と人間力とを身につけ、7つの能力を身につけることを期待するように、それらの力を教職員自らが身につけてこそ、本学の教育であることが重要です。

第3に、キャリア支援の充実をはかり、進路決定率90%を目ざすことです。1回生の時から、それぞれの授業の中で、それぞれの学生に接する職場で、そのことを意識してほしいと思います。卒業までの各段階で、さまざまな事情で学園を去る学生があとを絶ちません。中退率をできるだけ低く押さえることが大切です。学生は大学に対して自分の一生のための投資をしているのです。それに応えることが役員と教職員の義務であります。落ちこぼれない仕組みを、特に1回生から2回生の段階でシステムとして構築することが必要です。

第4は、通学部と通信教育部の一体感が、さらにほしいということです。教育の特長によって、異なる面、共通する面があるのは当然ですが、教職員が常に瓜生山学園全体のことを意識しながら仕事に取り組んでいただきたいと思います。通信は6万人のネットワークを持ち、今年初めて卒業生を出した芸術教養学科では、27.4%という高い卒業率を達成しました。また、通学部では、普通科高校に向けてさらに受験生を増やすことを、各コースの特性を考慮した入学試験のあり方、オープンキャンパスのあり方を、さらに考えて行かなければならないと思っています。

第5に、学生の課外の活動を活性化することが必要ということです。講義型の授業でも予習復習を十分に実行してはじめて単位の実質化が実現します。そのためには、自習できる環境が大学になればなりません。学生が自由に学習することのできる空間を物理的に増やすことを、あらゆる機会に、こころがけていただきたく存じます。

第6に、大学院教育の充実が重要です。そのためにはさらに人材を獲得しながら、また研究所や各センターの方々にも積極的に大学院教育に関わっていただくことが必要です。また、優れた大学院生を世界から招くことも重要で、留学生への充実した対応が求められます。

第7は、学生の安全を保証することが何よりも大切であるということです。キャンパスの整備は続けていきますが、学生の安全は学外での活動でも守られることが必要です。その点でのご協力をご家族の方にもお願いしておくつもりです。学外では、学生たちの、交通システムを無視する行動をときに見かけます。大きな道路の両側に新しい建物の建築が行われていますが、それらを行き来する学生の行動を分析し、最適なキャンパスのシステムを構築することが重要です。

さまざまの私の思いを述べましたが、何はともあれ、職場で怪我のないように、心身の健康に十分に留意されて、教育と研究と社会貢献の仕事に、取り組んでいただきたいと思います。同時に、私も同じように取り組んでいくことを誓い、私の所信表明といたします。

ありがとうございました。